

2022
4月

ゆうひろば

遊通信
第 182 号



「アイヌとカムイのためのレクイエム」上映会より、出演者の皆さん
(2022年4月18日、愛生館サロンにて)

特集 「2030 札幌オリ・パラ」 招致を考える

全面否定論を掲げず北海道でのオリンピックに反対する理由	・・・ 2
おことわりリンクは東京オリンピック・パラリンピックにどう立ち向かえたのか あるいは立ち向かえなかったのか	・・・ 4
インタビュー 上田文雄（元札幌市長）に聞く	・・・ 6
「オリンピック中止を求める誰でもサイレントウォーク」	・・・ 8
〈2030 札幌オリンピック〉後の未来が、本気で怖い	・・・ 9
オリンピックと先住民族 一発想を変えるべき時	・・・ 10
スポーツと私	・・・ 11

インターンシップ生から	・・・ 12
連載 タント アナクネ ピリカ（第1回）	・・・ 14
明日はつんどく屋で買ってほしい…	・・・ 15
リレーエッセイ 私とさっぽろ自由学校「遊」（第1回）	・・・ 16
連載 フィールドワークな日々（第88回）	・・・ 17
事務局便り / 5～6月の開講講座	・・・ 18～

特集 「2030 札幌オリ・パラ」招致を考える

昨年2020東京オリンピックが、コロナ感染が増え続けるという異常な事態の中で行われました。その過程では、2014年のオリンピックアジェンダとは、真逆なことが多く見られました。札幌市は、2030年に向け昨年11月にオリ・パラの概要を発表し、今年の広報誌1月号に特集、2月にシンポジウム、3月意向調査、市議会決定へと進んでいます。意向調査は、賛成52%でした。また道新の札幌市民対象の調査では、反対が57%と多かったです。まだまだ話し合いの余地はあります。いまだコロナ禍にいる私たち。本特集では、「札幌オリ・パラ」招致とは何なのか、もう一度様々な視点から考えてみようと思います。

全面否定論を掲げず北海道でのオリンピックに 反対する理由

鎌花収実

以下の文章は「北海道でオリンピックの中止を求める市民連合」全体での合意に基づくものではなく、私個人の想いである。

私は、2021年東京五輪のマラソンと競歩の札幌での競技実施を止めるため、「北海道でオリンピックに反対する市民連合」を厚別区の渡辺信一さんや西尾正道北海道かんセンター名誉院長等と立ち上げた。しかし、結果は、中止に追い込むことが出来ず、反対世論が盛り上がったとも言え切れず（コロナ感染拡大で一時的に中止世論が多数を占めたが、実施決定後は萎んだ）、私自身も家庭事情などで結成後は他の人たちに任せきりになった。よって、私の頭の中では総括会議を経て解散というシナリオを描いていた。

しかし、札幌の場合2030冬季五輪の招致活動中でもあり、招致決定か否かの状況である。よって、「北海道でオリンピックに反対する市民連合」は解散せず、対象を2030招致反対に切り替え、運動継続を決めた。

それは良いが、全共闘世代の方々はその見方を形成した青春期に物事を根底から否定す

る主張が流行っていたためか、オリンピックを自力を全面否定する人が多く見受けられる。もちろん、全面否定派の運動参加が悪くはないが、2020東京五輪で中止世論が一時的に多数派になったのは、コロナ感染拡大の不安からであって、全面否定論が受け入れられたからではない。

大多数の一般市民はメダリスト感動物語に共鳴し、文化としてのスポーツを楽しみ、健康のために自らもスポーツに励む。そうした素朴な感情を「踊らされた愚かな大衆心理」などと捉えていたりすれば、人々は振り向かず、振り向いても共感は得られまい。一般市民に訴える時は、全面否定論をグッと堪えるべきだろう。

これは、戦術としてだけではない。私自身も全面否定論には立たない。私は自分ができるのは全くダメなのだが、スポーツ観戦は大好きである。ファイターズ戦観戦は、私生活の楽しみの一つである。それはプロ野球だけではなく、オリンピック競技も同様なのだ。

貴族主義的なものとして五輪が始まったことは確かだろうが、本来のオリンピック精神とはスポーツを通じた世界平和の実現であり、

2000年のシドニー五輪開会式での南北合同行進には素直に感動したし、日本でも1932ロス五輪の馬術競技選手が硫黄島の戦闘において米軍捕虜を丁寧に扱ったと言われている。これまで本質を覆い隠す欺瞞的な出来事と罵れるだろうか？ 私にはそれは思えないし、恐らく一般市民の大多数もそうであろう。こうした素朴な市民感情は大切にすべきである。

ならば、なぜ2030札幌五輪に反対するのか？ 以下、私が2030札幌冬季五輪に反対する理由を述べたい。

まず、環境破壊とコストの問題である。1972札幌五輪では、滑降会場となった恵庭岳を競技終了2時間後に閉鎖し、春に植林したが、半世紀経過した今でも完全回復とはいえない。アルペン（回転、大回転、ヤソリ競技）ボブスレー、リージュ）会場となった手稲山や藤野では森林が多く失われた。1972当時の会場を再利用するので環境負荷やコストは少ないと積極誘致派は語るが、当時と比べ競技数が倍増したことを、どう説明するのか？ ちなみに1972札幌五輪には存在していない競技が私が知る限りでも、これだけある。

- アルペン スーパー大回転 複合
- ノルディック 女子ジャンプ ジャンプ団体

- ジャンプ混合団体 複合フリーヒル 複合団体 クロスカントリー複合 クロスカントリー団体 クロスカントリー女子30キロ
- バイアスロン 女子バイアスロン全競技（5競技） 混合リレー 追い抜き
- フリースタイル全競技（12競技）
- スノーボード全競技（10競技）
- スケート スピードスケート・チームパシュート スピードスケート・マススタート ショートトラック全競技（9競技） フィギュア団体
- アイスホッケー 女子アイスホッケー
- ソリ スケルトン チームリレー
- カーリング全競技（3競技）

この事実を一般市民にどれだけ周知しているのか？ 増加競技数だけでも大幅コスト増が分かる。フリースタイルやスノーボードは新会場設置が必要だろうし、既存競技場利用する競技でも、古くて使えなくなった会場は新会場建設やリニューアルが必要となる。

ちなみに市当局は、市の負担は約450億円と試算している。過去の長野の例を見ても690億円の赤字を20年かけてやっとならした。試算通りでも莫大な費用である。しかも、札幌市の財政債務はすでに1兆1千億円を超えている。国家は貨幣を発行出来るが、自治体は貨

幣発行権がないので、私たち市民にツケが回る。450億円を市民生活の施策、医療、福祉、教育、除排雪などに使う方が、遥かに有効ではないか？

コストと環境以外でも、五輪が国家によって政治利用（ナショナルリズムの高揚、ナチスの宣伝や東西冷戦を煽ることに使われた歴史など）されている現実、商業主義が激化（1984のロス五輪以降は特に顕著、アメリカのテレビ局のゴールデンタイムに合わせ、極寒の夜や酷暑の日中に競技を実施するなど）している現実がある。これは、本来のオリンピック精神に反している。

最低限住民投票が必要だろう。市当局は仮に反対世論が強くても招致がIOCで決定すれば実施するとしている。2022北京冬季五輪終了直後の感動が残っている間に世論調査を実施して賛成多数であると強調しているが、これでは十分な民意とは言えない。1年くらいかけて、問題点も市民に一定周知した上で住民投票で決着をつけるのである。これは、非現実的か？ いや、前例はある。1976年のデンバー大会は住民の反対運動で返上された。住民投票での敗北・五輪実施なら、私は受け入れる。

鎌花収実（かまはな おさむ）
北海道でオリンピックの中止を求める市民連合

特集

おことわりリンクは東京オリンピック・パラリンピックに
どう立ち向かえたのか あるいは立ち向かえなかったのか

宮崎俊郎

東京オリ・パラが終了してから半年が経過した。あの喧噪の期間とは何だったのか。いまだに私の中でしっくりしないまま、そして終了しないまま「モヤモヤ」を抱えながら生きている。

オリンピック災害おことわり連絡会（以下おことわりリンク（通称）と略）は2017年1月に結成され、形式的には今夏解散する方向で検討している。しかし、終了できない課題を多々抱えていて苦悶している。

現在取り組んでいる最大の課題は、12月26日にNHKがBSで放送した「河瀬直美が見つめた東京五輪」という番組における捏造報道問題である。そしてもう一つは、12月に公表された組織委員会の総括文書に対する批判である。

さらに2024年にはパリで28年にはロスで夏季五輪が予定され、2030年札幌冬季五輪招致問題が日本においては深刻な問題として存在している。これらの現在の問題については最後に触れたい。

1. 私たちの原則

おことわりリンクは組織的に綱領を持つようになかったりした組織ではなく、東京オリ・パラに様々な観点から反対する様々なグループ・個人の緩やかなネットワークである。だから「私たちの原則」といってもあくまで私の解釈でしかないが以下の「原則」には概ねメンバーの同意が得られるだろう。

第一は、名称にあるようにオリ・パラを「祝祭」としてではなく「災害」として捉えること。オリ・パラとは現代社会における「災害」のデパートだとし、それに反対する視点を「21の理由」にまとめた「反東京オリンピックガイドブック」を広く配布した。ここでその論点を紹介したいが紙幅に余裕がないため是非とも読んでほしい。

第二は、「世界のどこにもオリ・パラはいらない」としてオリンピックだけでなくパラリンピックの持つている障がい者に対する能力主義や差別性に反対すること。そして東京オリ・パラだけでなくあらゆるオリ・パラの廃止を行動の原点に据えること。

第三は、「復興五輪」の虚飾性を明らかにし、いまだ復興していない福島の人々と連帯すること。「聖火」リレーの出発地であった福島Jヴィレッジへの抗議行動も行った。

第四は、1年延期されたが、「コロナ禍で強行された東京オリ・パラがいかに私たちの「命」を軽視したかを強調することで廃止に追い込むこと。

2. 私たちの取り組み

5年にわたる私たちの取り組みを三期に分けて振り返ってみる。

●第1期：2017年1月（発足）から2020年3月（延期決定）

2017年は2月の国際おことわりコンベンションと題して韓国やリオから講師を招いて開催した企画を皮切りに、連続講座を開催して様々な観点からの五輪批判を検討した。この内容は「で、オリンピックやめませんか」（亜紀書房刊）に結集した。2019年の7月に「1年前企画」として世界の各地から反五輪アクティヴィストが参集し、集会・デモ

や臨海・福島へのフィールドワークも行った。反五輪研究の第一人者であるジュールズ・ポイコフにも早稲田大学で講演を行っていたので、報告集も刊行した。

●第2期：2020年4月から2021年7月（開会式）

1年延期決定されてからは、「中止一択」を掲げて様々な行動を行った。2021年4月からは毎週金曜日18時30分から20時まで「金曜行動」として組織委員会の入っている晴海トリトンビル前行動を開会式に至るまでほぼ貫徹した。この行動は当初10人程度で始まったが、最盛期は40人を上回るものとなり、中止を求める行動のペースとなった。

開会式まで数度のデモを行った。その中でも最大の行動が開会式1か月前の「オリンピックは私たちを殺す！やらせるものか「犠牲の祭典」6・23新宿デモ」だった。参加者は850名。1か月前が中止を求める行動としては頂点だった。7月23日開会式当日は、採火式の行われた都庁広場行動に300人、原宿からの開会式に向けたデモには700人が参加した。

●第3期：2021年7月〜現在

五輪開会期間中は分散型行動となった。中止一択を目指しての行動だったので、開催さ

れた場合の行動配置まで準備する余裕もなかった。しかし様々な会場に出かけて行ってアピール行動を試みた。会場内に声を届かせないということでは、オリンピック・パラリンピックの開閉会式の歩道も含めた封鎖と過剰警備は酷いものだった。開会式にはナルヒト天皇が閉会式には秋篠宮が宣言しに来訪していたことも手伝って異様な排除の構造が作られていた。

私たちは反五輪の取り組みを様々な観点からより広く届けるメディアとしてNolympics&NoParalympics TVを14回にわたって放映した。アーカイブとしておことわりリンクのブログで視聴できるので本稿で展開しきれなかった点を観てほしい。私たちのメディアを創設した点でかなり画期的な取り組みだったと思う。

●五輪弾圧

東京武蔵野では「聖火」イベント会場近くの歩道で爆竹を鳴らしたことで「威力業務妨害」で逮捕。その後起訴まで持っていかれ、現在裁判闘争が継続されている。8月24日パラリンピック開会式に対する抗議行動では警察が勝手に設定した「抗議エリア」に私たちを押し込めようとしたことに抗議した仲間を「公務執行妨害」で不当逮捕した。幸いなこと

に早期釈放を勝ち取ることができた。いずれも断じて許し難い弾圧であり、最大の五輪「災害」であることを明記しておきたい。

3. 世界のどこにもオリ・パラはいらない！

「河瀬直美が見つめた東京五輪」の中で反五輪デモに参加していない男性にインタビューした場面に「金をもらって参加した」という捏造テロップを付した放送の問題性を明らかにする集会を4月9日に行う。いまだに「デモの企画者であるおことわりリンクへの謝罪はなく、公共放送としてのNHKの犯罪性は度し難い。また公式記録映画として6月に封切られる河瀬直美監督の映画の存在もプロパガンダ映画として認め難い。

東京五輪で様々な問題が噴出したにもかかわらず、2030年に札幌冬季五輪を招致しようとしている。すでに世界の多くの都市がオリ・パラ開催を拒否しているため開催都市が見つからない状況が出てきている。引き続き札幌の開催反対の市民の方々に支援し、招致決定に至らないよう連帯していきたい。

No Olympics Anywhere
in the World!

宮崎俊郎（みやざきとしお）

オリンピック災害おことわり連絡会

特集

インタビュー

上田文雄さん

(元札幌市長)に聞く

議会決議から始まった

1972年の札幌オリンピックの時は、学生で東京にいました。

オリンピックについて考え始めたのは、2003年に市長になってからです。2005年3月に、市議会が夏季オリンピックの招致決議があって、私はそれを拒否しました。夏季オリンピックはとんでもないお金がかかります、冬季の比ではありません。当時は小泉首相の三位一体改革で地方交付金が減らされて、どこの自治体も財政難で大変な目にあっていました。莫大な自治体負担を要する夏季オリンピックなんて非現実的で、とてもできないと議会と議論しました。



朝日新聞が熱心で、夏と冬をやるのは札幌しかないというんです。今回、世界で初めて北京が夏冬やりましたけど、当時はミンコンヘンがやれるかどうか、やっぱり夏も冬もできる大都市としては札幌が一番だと言われていました。しかし、私は

やるのであれば冬季オリンピックだろうなと考えていました。

札幌のハード面での街づくりは板垣市政時代のオリンピックでほぼ決まったという感じがします。「虹と雪のバード」の「街ができる、美しい街が」という歌詞そのままです。地方都市がオリンピックで国際都市に飛躍していく、大ジャンプの72年だったと思います。すごい冒険でもあったでしょう。

私は、オリンピックを市民自治との関係でずっと考えていました。札幌市民のアイデンティティ、精神の拠りどころとしてみると、とても大事なイベントだと、今もそう思っています。

オリンピックの理念

オリンピック憲章は、オリンピックの根本原則ですが、「スポーツを通じて肉体と意志と精神：バランスよく結合させる生き方の哲学」「スポーツと文化・教育を融合」「平和の追求」とあるように、本来のオリンピック理念の素晴らしいさは誰もが認めるものです。人間が高みを求めるといふ、人間の本性を見抜いた上で競うことを哲学化していったんだと思います。

う、国民負担の大きさですね。

長野はひどかった。使途不明金が多額にあり無理をしたツケを未だに引きずっていると感じます。札幌は無理をしなくても、IOCに金をばらまかなくても、大丈夫です。透明性を大事にして、施設整備は当然必要なものに絞り込む。

試算額450億円、市民一人あたりの負担額22,500円の計算になりますが、厳しく査定して無駄を排除する。これは都市ブランド向上のため、3週間世界中に札幌を発信する経費であり、雪まつり期間中のオリンピックは世界に雪と共生する札幌人の創造的文化を発信し、観光インバウンド誘客広報費用であり、国際都市への投資だと言えます。

これをどう稼ぎ出すか。篠路清掃工場廃止を可能にしたのは市民の力でした。市民が毎日ゴミの分別をするゴミ出しルールの実践、いわば市民自身の行動で建替え費用380億円を節約した経験を私たちは持っています。380億円を稼ぎ出したんです。市民による自治の実践で経費削減と環境に優しい循環社会への道を札幌市が示した事例だと言えます。

これからの街づくり

これからの時代に大事なものは何か、そのために行政は何をするか、それと一緒に市民は何ができるか。札幌市がこれまで取り組んできた市民自治の推進や環境首都、創造都市の誇りを

IOCやJOCのあり方は別の問題ですね。商業主義や政治的振る舞いに対する厭世観は少なからず市民のオリンピック離れの傾向を作っていると思いますが、だからオリンピックはダメだとは思わない。もっと健全な財政運営と理念に忠実な行動に努めればいい。開催地ができる限りの努力を示せばよいと思います。開催したいと思っても、どこでもやれるものではありません。札幌はすべての条件に適した場所だと思われるので、これを街づくりに生かし利用するのは賢い選択だと私は思っています。

オリンピックと街づくりと市民自治

市長になってから、冬季オリンピックを札幌に誘致することと街づくり、街の発展と市民自治とをずっと前向きに考えてきました。いろいろな考え方はありますが、札幌の歴史を踏まえながらどう街の将来を展望し、どのような都市像を描くかの議論を重ねて参りましたが「世界に開かれた街にしよう」ということになりました。

私が市長になってまもなく人口減について考え始めました。藻谷浩介さんを招いて職員と勉強会などしたのですが、政令指定都市で人口減について考えているのは札幌くらいだとその先見性の評価を頂きました。当時はまだ人口が伸びていましたが、伸び幅が減少し先が見え始め

ていたんです。人口が少ないこと自体は悪くはないのですが、少子高齢社会は稼働年齢人口の減少を意味しますので、世代の循環がうまくいかない人口構造で、経済活性化の方策も含めて各界各層の意見を聞きながら職員と議論し、国際化を含めた交流人口の拡大が札幌にとって極めて大事な柱だと結論しました。

国際化、都市イメージのブランド化、住民の誇りを考えると、「雪」が大事であることに気づきます。これだけの雪をどう生かすか、PRポイントとして大事であり、除雪は大変だ、雪は嫌だと思っても、それでもこの街が好きだという札幌人の心情・気質ですよ。

札幌市民は72年オリンピック開催を担ったという市民としての誇り (Civic Pride) と札幌の国内外における知名度・都市ブランド獲得を経験しています。地下鉄や地下街ができ、高速道路が整備され、都市化が進んで便利になったということだけでは決していないのだと思います。

市民が一緒に稼ぎ出した380億円

反対する人たちは、オリンピックのどこに反対なのか。オリンピックの理念とこれを実現すること、これに参加すること自体にNO!という札幌市民は少ないと思います。競技内容にはみんな夢中ですよね。サッカーにせよプロ野球にせよ、「見るスポーツ」の概念は既に確立しています。批判されるのは、無尽蔵に金を使っちゃ

柱に、高い理念を掲げてこれからの街づくりをしていく。冬季オリンピックはその契機になると思います。私は2014年のソチ五輪に行くなど様々な調査の上、11月に議会が誘致表明をし市民に実現へのメッセージを送りました。問題は開催経費の負担金450億円を札幌市の行政組織と市民の自治活動で生み出す工夫をどうするかです。例えば、省エネによるコストダウンですね。30年までに市有施設全てについて完全LED化をやり遂げることでどれだけコストを削減できるか。インシャルコストの捻出と運用コストをしっかりと計算して市民に示す。市民も省エネは富を生むことを理解し、ともに活動を展開することでだけの利益が生まれ、環境問題に貢献できるか。

いまお金がかかることにはみんな反対しますが、遠くを見て先を考えたら、今やっておいたほうがいいことはたくさんあると思います。

オリンピックは、世界中の誰でも知っています。3週間世界中が札幌を注視する。450億円が札幌が如何に環境先進都市であるかを広報できる、SDGs実践都市として高い評価を受ける絶好の機会とすべきです。招致と具体的な計画についての透明性と財政的健全性を保ちながら、成熟した市民自治の成果として環境政策実践をしっかりと絡めたオリンピック実現運動とすることがポイントだと思っています。

(聞き手・まとめ 細谷洋子)

特集

「オリンピック中止を求める 誰でもサイレントウォーク」 桃井希生

2020年7月17日、東京オリンピック開催を1週間後に控えたこの日に、友人とオリンピック開催に抗議するデモ「オリンピック中止を求める誰でもサイレントウォーク」を実施した。

オリンピックには元々反対だが、昨年は新型コロナウイルス流行と生活の混乱が続く中で強行開催に、命と生活を脅かされる危機感を覚えた。特に札幌の中心部を囲うようにして行われるマラソンは生活への影響が大きく、家のポストに当日の交通規制を知らせるチラシが入っていたときに堪忍袋の緒が切れ、もうどれだけ遅くても反対の声をあげなければと思った。デモはマラソンの交通規制の範囲の広さを表すために、マラソンコース1周をなぞる形で計画した。市内4つの区をまたがる約20kmの道だ。マラソンで同じ範囲の交通規制をするのだから表現の自由の行使であるデモに許されない理由は無いと、自分たちを奮い立たせながら警察へデモ申請をして、綿密な打ち合わせの後、無事に受理された。当日は朝8時に大通公園集合。この日、最高気温は32度。デモ参加者は動きやすい格好

で来るので、ハタから見れば遠足みたいだ。感染対策のためにシユプレヒコールは行わず、歩きながらマイクリレーをする形をとった。初めてデモに参加する人もいて、参加者それぞれがオリンピックに反対する理由を話す。「難病を抱えている。選手にとって大事な大会かもしれないが、私にとってもいつ失うか分からない大事な1日だ」「五輪の能力主義が嫌いだ」など、形式ばらない様々な話を聞くことができた。なにせ時間はたっぷりあった。話すのが苦手な人も、他の人がとりとめもなく話す姿を見て一言でも話してみようという気になるようだ。声は市内に響き渡る。事前に3000枚のポステイングをした効果か、デモ中に沿道から拍手をもらうことが何度もあり、オリンピックへの怒りは自分たちだけのものではないことを実感した。参加者同士で水や飴を配り合い、原付にクーパーボックスを載せた「給水車」もあったおかげか、体調不良者は一人も出なかった。昼休憩を挟んで、17時にゴールの大通公園に着。8時間にわたるデモで、途中参加・退出を含めて約100人が参加した。

わたしが五輪に怒りを覚えるのは、自治と生活をとことん軽視する姿勢だ。これは2030年札幌五輪でも変わらない。札幌や北海道、そして日本には人権的な課題や生活上の問題が多くあり、これらを通り越して「平和の祭典」など欺瞞以外のなにものでもない。町はそこで暮らす一人一人のためにあるはずだ。尊厳ある社会の実現は、五輪ではなく、日々の暮らしの先にある。



特集

〈2030札幌オリンピック〉後の未来が、本気で怖い 若月美緒子

〈近未来の札幌の街角での会話〉(2035年頃のイメージ) 〃

「札幌の学校給食は以前はおいしかったのに、給食センターで何千食も調理するようになったら毎日冷凍食品を揚げたものばかりになった。」栄養士と調理員の雇用を減らし、給食センターにして施設を合理化したからね。人件費削減のため仕方なかったんだ。」

「市が外国の会社に水道事業を売ったとたん料金が跳ね上がった！」「気楽にお風呂にも入れないよ。どうやって節水するか悩む毎日(泣)。」

「有料ゴミの袋代がオリンピック前の2倍になるなんて、どうなってるの?」

「スキー、ジャンプ、リユージュ、スノーボードの施設のために山肌が新しく削られて、そこに線状降水帯が土砂降りの雨を降らせた。土石流が住宅地を襲った被害の責任は札幌市にあるのか、オリンピックへの期待が高かった道民にもあるのか…。遺族は札幌市を訴えているが。」

「コロナ禍で保健所や公立病院の役割が私たちの健康を守るためにとてもたいせつだとわ

かったはずなのに、どちらの予算も削られる一方。医療が必要なのに長く待たされる患者が増えた。」

「国民健康保険・介護保険料金は、また引き上げだよ。」

「市営駐輪場の利用料金はずっと100円だったのに4月から200円になるんだって。」

「生活保護や児童扶養手当の審査基準が厳しくなって受給できない人がさらに増えたよ。」

「2030年札幌冬期オリンピックの翌年から坂道を転げ落ちるように市の財政の何もかもが苦しくなった。あんなに反対した水道民営化も『老朽化した配管を取り替える費用が札幌市にはない。水道事業を民間会社に売る以外に道はない』と押し切られてしまった。」

「札幌市って、どうしてこんなに貧乏になったの?!!」

「オリンピックの費用が2022年発表の市の予算で収まらないことは誰でも知っていたよね!」「利益はIOCと世界の巨大企業が独り占めだということも。地元には恩恵がないどころか、運営に必要な交通規制などで平常営業も妨げられた。」札幌市民に利益がなけれ

ば市の税収も増えるはずがない。初めから市の持ち出しばかりで、結局は何兆円もかかるとわかってた。それでも招致を決めたのだから、何をか言わんや、だよ。」

「北海道出身のアスリートがオリンピックで活躍して、開催中は盛り上がりたけれど…考えてみれば、どの競技にも世界選手権などの国際大会はある。これほどの犠牲を強いるオリンピックを開催する必要があったのだろうか?」

「今さら後悔しても後の祭。札幌市は2021、22年に7億7千万円もかけてオリンピック招致のPRをした。市民に夢をふりまいた後の現実がこれさ。」「……………」

…以上はもちろんフィクションですが、十分にあり得る未来図だと私は考えています。13年後にこんな惨状とならないよう、今できることを考え、行動したいです。私にとって、この文章はそのための「はじめの一步」です。(既に遅いかも…)

若月美緒子(わかつきみおこ)
 遊講座「人新世の『資本論』 読書会の呼びかけ人。自宅で「コミカフェ加伊」を開店して4年目。(まだまだカフェ修行中…)

特集 オリンピックと先住民族

―発想を変えるべき時― 上村英明

2030年に札幌に冬季五輪を再誘致する案があるようだが、反対である。国際五輪運動の歴史が織りなす教訓にあまりに無頓着だからだ。知られていないが、運動の創設者ピエール・クーベルタンは差別主義者であった。彼は、スポーツによる平和を夢みた。1904年の第3回セントルイス大会で、「人類学の日」と称する先住民族競技会が開催されると、不快感を示し、大会そのものを欠席した。その理由は、白人以外の人々が参加すれば、五輪そのものが衰退するという誤った思い込みであった。しかし、その後、五輪大会は多くの人種・民族の参加を経て、紆余曲折しながらも、今日まで発展して来たと言つてよい。

他方、クーベルタンの優れた着想は、大会を都市間の持ち回り開催、選手を個人参加とし、スポーツ博覧会など文化交流イベントを構想したことである。しかし、開催地が広がると、個人参加できる選手が少なくなり、1908年のロンドン大会から参加には「国内オリンピック委員会」を通さねば

ならず、見返りに渡航費や宿泊費が委員会から支給されるようになった。選手役員による、開会式での国旗・プラカードを持った行進も実現する。その結果、大会はメダル獲得を通じ、国家間の疑似競争に墮するようになり、1936年のベルリン大会では国威発揚の場として巨大イベントに変貌した。さらに、1984年のロサンゼルス大会以降はショービジネスとしての性格が強化され、2021年コロナ禍で強行された東京大会ではこうした矛盾が一挙に噴出したと言つてよい。

もちろん、全面否定も可能だが、2つの可能性を紹介したい。オリンピック運動の優れた点は、スポーツを通じ、多様な人種・民族の交流の場を世界各地に生み出すことである。そうであれば、同じ都市での2巡目以降の開催は本来回避すべきだ。むしろ開催経験都市が基金を出し合っ



世界先住民族オリンピック2017より

1990年の「北米先住民族オリンピック」開催を経て、ついに世界大会が実現した。文化行事も充実したこの企画は、本来の五輪運動の成果であるかもしれない。同時に、彼によれば、国連先住民族権利宣言第31条知的財産権の実現にも当たる。

上村英明(うへむらひであき)
市民外交センター共同代表

特集 スポーツと私

スポーツは、定められたルールの下で勝敗を争う戦いである。人間が元々持っている闘争本能が戦争という形ではなく、スポーツで戦うことによって昇華されて欲しいものである。昨今はついついそんなことを思ってしまう。

僕にとってスポーツとはテニスである。高校で始めてから半世紀を遙かに超える年数に亘ってテニスをしてきた。僕は、自分のパーソナリティの3分の1くらいは、テニスで形作られてきたように思う。特に大学時代の部活の影響は大きい。個人戦で学んだことも大きい。団体戦の負けることができない試合から学んだことの大きさは計り知れない。

苦しい試合になると、人は負ける理由(負けても良い理由)を一生懸命に探す。見つかったときに「安心して」負けるのである。負ける理由は、体調の所為にしたり、単独スポーツでない場合にはペアや味方の仲間の所為にすることができる。負ける理由がみつからな

干場信司

に入っているとき)には、勝つことができる。勝敗の瀬戸際には厳しいものがあるが、同時に面白い。

北京で行われていた冬季オリンピックでも、その厳しさと面白さを見せてもらうことができた。高木美帆選手の1,000mでの金メダルには、彼女が最も得意とする1,500mと団体パシュートでの敗戦(と言っても銀メダルだが)そしてマークされていなかった500mにおける銀メダルが必要であった。

カーリング女子でロシアが決勝進出できたのは、予選リーグの最終戦で優勝候補筆頭のスイスに敗れ、決勝トーナメントへの出場を一端諦めたという「出来事」があったからだ。決勝進出を決めた準決勝において、前日に負けたばかりの同じスイスに対し、ロシアに負けた4人からは、微塵の恐れや迷いのない「ハツラツとした強気」(まさしく「ゾーンの境地」)を感じることができた。それが、スイスを見事に破ることができた理由であろう。しかし、決勝(対イギリス)でのロシアの4人には、「ゾーンの境地」を見ることは

できなかった。彼女たちが気を緩めたわけではないだろう。それだけ、難しい「境地」なのだ。

上述のように、スポーツは私たちに、ふだんは人間の奥深いところに隠れている力を見せてくれる。まあ、そんな七面倒くさいことを言わずとも、スポーツは私たちを大いにリフレッシュさせてくれるものである。

このようにスポーツ好きの自分ではあるが、2030年の札幌オリンピックの誘致には反対である。それは、経済的な理由からではない。子どもころから札幌で育ち、1972年の札幌オリンピックでは会場係などのアルバイトも経験した。あの時以来、札幌が東京化し始めたことに、不満と寂しさを感じたが、札幌に住み心地の良い街になるためには、それなりのインフラの確保が必要だったように感じている。しかし、50年経った今はその時と異なっている。今札幌に必要なのは、さらなるインフラや華やかさではなく、「自然」と「環境」と「福祉」を大切に、ひとり一人の幸福度を高める社会ではないかと思っている。

干場信司(ほしはしんじ)
せつぽろ自由学校「遊」理事

インターンシップで感じたこと

嶋田麻璃絵（小樽商科大学3年）

大学生の春休みはとても長いです。その期間を何に使おうかと私は迷っていました。アルバイトや読書、旅行など、どれも魅力的ですが、私は今しかできないことをしたいと思いました。そんなとき、友人からNPOインターンシップのお誘いを受けました。いくつかあるインターンシップ先の候補から、私は社会をもっと知りたいと思い、自由学校「遊」のインターンシップへの参加を決めました。

「遊」では、会場の設営や受付、ZOOM操作などのお手伝いをしました。初対面の方とお会いするのは緊張しましたが、気さくに話しかけてくださる方も多く、すぐに楽しんでインターンシップに参加できるようになりました。

インターンシップを経て気づいたことは、「社会を広く知ろうとすればするほど、自分の近くに社会問題が見えてくる」ということでした。例えば、連続講座の「ミヤンマー（ビルマ）で、いま何が…」では、北海道に多くのミヤンマーの方々がいることを知り、驚きました。ニュースでミヤンマーの軍事クーデ

ターのことは知っていましたが、自分の住む北海道にミヤンマーの方がいらして、彼らや家族や友人が危険な状況にあると改めて聞くと、心が痛みました。後日、講座で知った札幌駅でのデモに行くと、丁度ミヤンマーの方がマイクを持ってお話をされていました。危険な状況に置かれている人が確かにいるのだと、強い実感をもって感じました。それから、報道番組や新聞で「ミヤンマー」という単語が目につくようになり、今まで自分がどれだけ無関心だったかを痛感させられました。

当初、二か月のインターンシップは長いと思っていましたが、終わってしまうとあっという間に感じます。多くの人と会い、多くのことを学んだ二か月間でした。私は、インターンシップ期間の二か月間に、計十三回の講座に参加しました。講座を通して、今まで知らなかったことや知っていると思っていたら間違っていたことなど、多くのことを学びました。経済、歴史、環境といった分野を越えて、幅広い知識を身につけることができました。

と思います。質疑応答の時間では、要点のまとまった質問や発言をすることができず悔しく思うことも多々ありましたが、自分の言葉で自分の考えを表現できる機会はとても貴重でした。この充実した二か月間で学んだことを決して忘れず、これからの人生を有意義なものにするための財産にしていきたいです。また、機会があれば、今度は通して講座に参加したいです。講座案内のページをめくりながら、どの講座に参加するかを選ぶ楽しみも「遊」の魅力のひとつだと思います。

最後に、私たちがインターン生として受け入れてくださった「遊」の皆さん、初歩的な質問にも丁寧に答えてくださった講師の方々、興味深い意見を聞かせてくださった受講者の皆さんにお礼を申し上げます。



善く生きる

佐藤碧（北海道大学法学部3年）

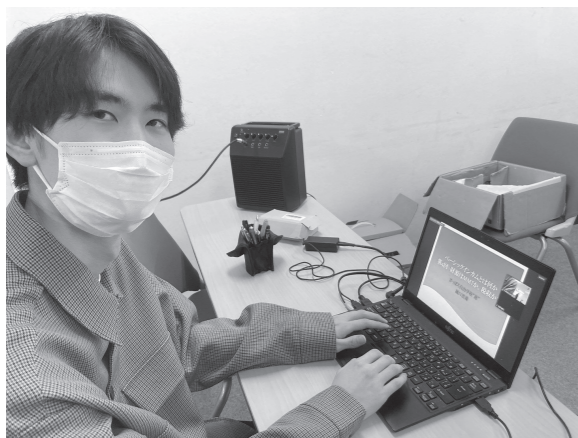
みなさん初めまして。2月と3月の間、「遊」でインターンをしていました佐藤と申します。冒頭から何ですが、私は怠惰な大学生です。大学入学当初に持っていた長期インターンで自分を高めようという気持ちや、社会問題に関するボランティア活動をしたという気持ちは全く行動に起こせず、貴重な大学生活を浪費する日々が続いていました。そんな中、NPOインターンとして遊にお世話になりました。何か自分を変えたい、そんな思いからの行動でした。

インターンと聞くと堅苦しいですが、事務局の小泉さんは僕らに事務仕事の負担をかけることなく、15を超える様々な講座に僕たちを参加させてくれました。その中で、僕が「遊」の方々を見て感じたのは「知的好奇心の高さ」です。みなさん自分が興味のある講座に自発的に参加し、新たな知識を獲得し続けていました。また、講師の方への質問は大学の授業よりも活発なものでした。そんなみなさんに引け張られるように僕も好奇心を持って講座に臨むことができました。

そうして参加した沢山の講座には、当初全く知識がないものも多くありました。しかし、いざお話を聞いてみると、海外の現状や歴史、経済問題、最新技術などの実情を知り、なんと興味深いのだと感動しました。知識がなかったにもかかわらず、です。ここでお伝えしたいのは、「新しいことに挑戦することの素晴らしさ」です。遊で自分が知らない問題に関する講座を受け、新しい知識を得てそれについて考えることは、これまで

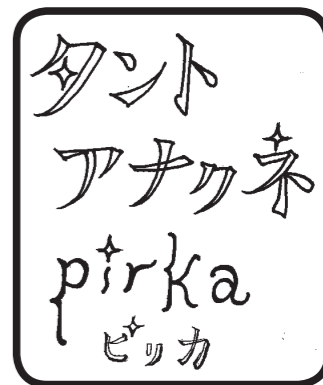
の日常に新たな彩りを与えてくれます。僕が経験した中でいうと「北大とアイヌの関係」です。自分が通っている大学にも関わらず、こんなにも知らないことがあるのかという気づきは、僕が大学内を見る際の視点を大きく変えてくれました。

タイトルの「善く生きる」について触れていません



した。僕は高校の倫理の先生が面白かったおかげで倫理や哲学が大好きなのですが、「善く生きる」とは、最も有名な哲学者の一人であるソクラテスの言葉です。言葉の意味としては、「自分が知らないということを見つめ、知る（知）して新たに学び続ける人の方が、自分には知っていると満足している人よりも精神的、道徳的に向上心を持って生きられる」という意味だったはずですが。僕はこの2ヶ月間で「善く生きる」ことの価値を再認識しました。これからも、新たな知を求めて日々成長を続ける「善く生きている」「遊」のみなさんのようになれるべく、精進したいと思います。

最後に、私たちが暖かくインターンに迎え入れてくださった「遊」に関わる全てのみなさま、特に、右も左もわからない私たちに多くのことを教えてくださった事務局の小泉さん、そしてこの拙稿を最後までお読みくださった心優しいみなさまに心より御礼申し上げます。また会いましょう。



原田 公久枝
第1回

ノンノさんの後を任されて書きます。アイヌのきくです。ノンノさんっていうのは花崎皋平さん、アイヌ語で花はノンノだからそう呼んでます。

ノンノさんと初めて会ったのは二〇〇九年七月一五日(水)北海道立文学館、特別展示室での企画展『語り、継ぐ。アイヌ口承文芸の世界』を見に行った時でした。山田秀三と金田一京助と菅野茂の録音を聞いていると後ろで待っている男性がいる。それなら、と知里真志保の通りのききなしの録音を聞いていると件の男性が後ろで待っている。その展示が終わる一七時前にその男性を迎えに来たのが、遊で知り合っていた七尾さんで、きくちゃんには花さんをご存じ?と紹介されて名刺を貰うと「花崎皋平」と名前しか書いてない。「どんだけ有名人が知らんけど、お前と連絡とりたいヤツはどうすんのよ?」と聞くと「じゃあ

あ住所を書きます。でも僕の経験でいうと琉球とアイヌの人は余り手紙を書かないからな」と言われ、ムカついた私は帰ってすぐ手紙を書いた。飾らないと言えは聞こえはいいが、大した失礼な手紙だったはず。しかしノンノさんにはそれがウケてペンパルになったのでした。多い時には週一通ペースで文通して、偉そうに講釈垂れる訳ではないけど、そのあたにかい丁寧で上品な文章で私にものを書く、ということを教えてくれました。

遊での出来事という何年か前、ある講座が終わった後で、友人(七〇代男性)と友人の知り合い(六〇代男性)とその知り合いの後輩(二〇代男性)と私(四〇代女)四人で飲みながら話していた時、私が「こういう講座もさ、貧乏で生活に追われているアイヌは聞きに来ることすら出来ない上に、来たとしても、お前らが難しい言葉で話すから(ああ、頭の悪いアイヌが聞きに来ちゃいけない所だったんだなあ...)って情けない思いして帰ることになるんだわ!」って文句垂れてた時に、二〇代の後輩くんが「ほぼ言いがかりじゃないですか!日本人にも貧乏で生活に追われている人はごまんと居ますよ!」って言うてきたから「お前みたいに恵まれたものに何がわかる!」って言ったたら「恵まれてるっ

て何なんですか!僕だって家は貧乏で、それでも叔父さんの援助で苦労して大学出て、今があるんです!」ってくっくっかかってきたから、怒り心頭に発するとはこのことで私はものも言えなかった。その時友人が「実家は貧乏でも君には援助してくれる叔父さんが居ただろう?アイヌにはそういう叔父さんは居ないよ、親類縁者全員が貧乏で、大学はおるか高校に進む者も少ない。現にここにいるきくちゃんには中卒だよ」と静かに言ってくれた。

講座でも勉強になるが、その後の飲み会で人と繋がったり、考えらさることも多い。私のそんな日々を、ゆうひろばで書きます。

原田公久枝(はらだきくえ)
札幌在住。18才年上の旦那有り。子供なし。集金と配達のパートをしながら、アイヌの活動(歌・踊り・講演・執筆・お笑い等)をしている54歳です。

自然食ホロ
札幌市東区中沼西5条2丁目3-16
TEL: 887-6224
いつも喜んで、感謝して。
http://holo.sunnyday.jp/

田中正造と渡良瀬を歩く。石牟礼道子、森崎和江、高木仁三郎らとの共鳴の中から新たな思想を研ぐ。

日は昇り日は沈み
昔生まれた者は 別れに備える
海と空とは 常にして転々
2002年1月1日 年賀状の今年の言葉として記されている。

不安や不信が渦巻き、あきらめに似た感情に囚われそうになる昨今、じつくりと「花崎皋平ワールド」にひたってみませんか?
(大嶋薫)

明日はつんどく屋で買ってほしい...

『詩集 アイヌモシリの風に吹かれて』
花崎皋平著 (クルーズ、1800円)



『生きる場の思想と詩の日々』
花崎皋平著 (藤田印刷エクスプレントブックス、3300円)



花崎皋平ワールドへようこそ

花さん(花崎皋平氏)の著書が相次いで出版された。2009年に小熊秀雄賞を受けた、長編物語詩「アイヌモシリの風に吹かれて」の増補復刻版と、日記をもとに精神的な歩みを整理・摘録し、折々の詩を組み込んだ「生きる場の思想と詩の日々」である。

前者では、北海道を終の栖(ついのすみか)と定め「アイヌ民族と共に生きる希望を望み見る」ことを決意した花さんの心象風景が謳(うた)われ、アイヌの生活と文化を心から愛しうやまう言葉がほとばしる。

後者は、信仰と文学そしてマルクス主義との出会いから在野の哲学者として思想を研ぎ

続ける現在まで、人と出会い、書物を読みこなし、世界を旅し、芸術を祝い、(新たな変革主体としての)ピープルとして生きる、一人の人間の歩みであり時代の記録である。

現在につながる「人間花崎」の原点は、全共闘運動によって問われた「自己の存在と社会の矛盾」と向き合う道を選び、伊達環境権裁判を通じて有珠の漁師たちと出会ったことにある。(と、およそ20歳ほど年下ながら、市民運動の仲間として友人として、だいたい後ろから伴走してきた私は確信している。)

花さんの新たな旅は、三里塚、水俣、沖縄そしてアジアへと広がり、「地域をひらく」シンポジウムでは全国各地の市民運動との対話と交流を重ねる。松浦武四郎と北海道を、

いつだって No Nuke!
北海道のエネルギーの未来を考える
10,000人の会

オーガニック・自然食品専門店
らる畑
おべんとうとおそうざい
らるごはん
札幌市中央区大通西23丁目
Tel 614-2406 Fax 614-3836
http://rarubatake.com
10時~19時(日~17時・祝~18時)

理事 北村 公一

さつぽろ自由学校「遊」が設立して30年以上が過ぎました。人間で言えば30代。壮年期に入ります。ここで一区切りという意味でもそれぞれの人のとって、自分と「遊」の関わりをリレーエッセイという形で綴ってみようと思います。まずは、理事のメンバーから始めていきます。

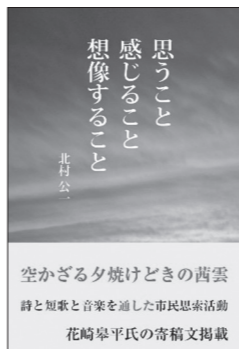
私と遊の関りは、意外と古く北12条の「コピー屋こんとん」や北18条の喫茶店「ひらひら」で花崎さんと読書会参加から始まりです。1989年のピープルズプランでは、二風谷まで出かけました。「遊」の設立時に花崎さんから「一緒に…」と声をかけていただきましたが、当時は、職場（小学校）の仕事が忙しく、断ってしまいました。

その後、1階が歯医者で6階に教室があった時（心広北1条ビル）から講座の記憶があります。当時、水餃子作りや踊りなどもありました。また越田さんと顔が似ていることもあって、間違えられることもありました。



交流会終了後、筆者、林光さん、吉村さん、七尾さん、花崎さんと（2003年12月）

現在の愛生館ビルの2階に事務所あった時、札幌市教職員組合音楽部会と「遊」と一緒に作曲家の林光さんの講演会と歌の演奏会を開きました。それはそれは、とても楽しい時間でした。（写真）
2013年に退職して正会員になり、自分でも講座を開くようになりしました。少人数でしたが、そこでも何人かの方々と知り合うことができました。18年から理事としての活動をしています。前後期の講座案内のパンフレットの表紙裏側と最後のページには、「遊」の活動趣旨や設立趣旨がいつも明記されています。「市民がつくる市民のためのオルタナティブな学びの場」です。
オルタナティブがなくなったらどうなるでしょうか？「ほかに手段がなかった」「仕方なかった」「これしかない」「これがただ一つの道です」という具合に物事が決まっています。（現にそう言っていた為政者を私たちは知っています。）
そうならないためにもこれからもオルタナティブな想像力を膨らませながら歩んでいきたいと思っています。
個人的な話で大変申し訳ありませんが、今春、「思うこと感じること」を想像すること」という題で自費出版しました。



第八八回 山鹿順子さんのこと

若いころに東京でお世話になった山鹿順子（やまかじゅんこ）さんが八五歳で亡くなってから、一年経つ。山鹿順子さんは、初期のころからアジア太平洋資料センター（PARC）にかかわっていた一人で、そのうち翻訳会社「リングア・ギルド」を立ち上げ、晩年は横須賀で反戦運動にかかわっていた、という人だ。

一九三五年に朝鮮半島で生まれた山鹿さんは、戦争が始まる前に日本に引揚げ、戦後、障害児の施設で働いた。一九六〇年代には、ソーシャルワーカーのための国際プログラムに参加するためアメリカに渡り、帰国後ベトナム反戦運動にかかわったあと、一九七一年に再び渡米して大学院で社会福祉を学ぶ。再び帰国したころ、生まれたばかりのアジア太平洋資料センター（PARC）にかわりはじめた。さらに、漁民研究会、エビ研究会（鶴見良行さん、村井吉敬さんら）などにもかかわり、そして、僕が山鹿さんに出会う「自主講座」のメンバーでもあった。



出会うてしばらく経ってから、僕は、山鹿さんから鶴見良行さんに引き合わされ、エビ研究会の活動に参加することになった。山鹿さんに促されて、タイで開かれたNGOの国際会議に参加したこともあった。

山鹿さんは当時「アメリカ帰りの市民運動家」として、市民運動の現場で通訳や翻訳を一手に引き受けていた。それがやがて山鹿さんの「仕事」にもなり、翻訳会社「リングア・ギルド」の設立（一九八三年）となった。

僕は二〇代を自主講座での反核・反原発運動と鶴見良行さんらとの共同研究に明け暮らして、その間、山鹿さんにははずいぶん助けてもらった。何か具体的に助けてもらったというより、親と子ほどの歳の違う山鹿さんに精神的に支えてもらった部分が大きい。山鹿さんは、市民運動の中でも、あまり表に出る方ではなく、黒子として動く方で、また、僕のような若い人間を支える役割でもあったように思う。

山鹿さんの若いころについて、僕はあまりちゃんと聞く機会がなかったのだが、ベトナム反戦運動の中で

米軍の良心的脱走兵の支援運動にかかわっていたことを、山鹿さんが亡くなってから知った。知る人ぞ知る「ジャテック」だ。山鹿さんは、ほとんどがお互い知らないジャテックの支援者ネットワークの中で、脱走米兵の「来栖君」と「神田君」（もちろん偽名）の世話をしたのだという。「集団疎開でのいじめや、競争による大人の態度に人間不信と自己否定による、十代の半ばから入り込んだ人生の暗いトンネルからいまだ抜け出せずにあがいていたときでした。そんな自分に反して、二十才という若さで戦争を拒否し、（中略）軍隊から脱走し、（中略）ついに自由を得て文字通り空を飛んでいった来栖君を見送ったときの感激は、今でも忘れられません」（非核市民宣言運動・ヨコスカ『たより』二二六号）。

山鹿さんは、晩年熱心にかかわった横須賀での反戦運動では、米兵たちに直接語りかけるという運動を担った。反戦月例デモには生涯出づづけた。

参考：「山鹿さんを記憶する」<http://linguaguid.com/yamakaj/>

宮内 泰介（みやうちたいすけ）
1961年生まれ。さつぽろ自由学校「遊」共同代表。北海道大学教員（環境社会学）。ソロモン諸島、北海道、宮城などで、環境、生活の調査中。



さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

会場&オンライン併用講座 (2022年5~6月開講分)

(会場記載のないものは愛生館ビル5F 501会議室にて)



お隣は外国人「よそ者」から「共生」へ

- ① 5/2 (月) 18:45~ 『お隣は外国人』出版までの道のり ★湯山英子
- ② 6/6 (月) 18:45~ 外国人介護福祉士を養成して ★澤田乃基

カール・マルクス著『賃労働と資本』を読む ★チューター 宮田和保

- ① 5/4 (水) 18:45~ ② 6/1 (水) 18:45~

資本主義を問い直す 会場: 愛生館サロン (愛生館ビル6F)

- ① 5/9 (月) 18:45~ 資本主義とはどんなものか ★宮田和保
- ② 6/13 (月) 18:45~ 株式会社と金融からみる現代 ★神山義治

出会う英語 ☆英語で語ろう☆ ★講師 アンドレス・パトリシアン

- ① 5/9 (月) 19:00~ 毎月第二・第四月曜

知っておきたい身近な健康被害 - 5G のリスク、フッ素使用の実態

- ① 5/10 (火) 18:45~ 5Gをめぐる各国の状況 ★加藤やすこ
- ② 6/7 (火) 18:45~ 虫歯予防フッ素の効果は疑問 ★秋庭賢司

タシハンボン / もういちど ハングル ★講師 コ・ソングヨン

- ① 5/12 (木) 19:00~ 毎月第二・第四木曜

20世紀を切り開いたアイヌ列伝

- ① 5/11 (水) 18:45~ パチエラー八重子が拓いた道 ★石原真衣
- ② 6/8 (水) 18:45~ 違星北斗の東京を読む ★山科清春

越境する人と文化を通して読み解く東アジア III ★講師 朴仁哲

- ② 5/17 (火) 18:45~ 大阪府を事例として ③ 6/21 (火) 18:45~ 韓国の京畿道を事例として

北海道の"核のゴミ" 処分問題を考える part 2

- ① 5/18 (水) 18:45~ 「文献調査」に抗して一寿都町から ★越前谷由樹
- ② 6/15 (水) 18:45~ 「処分研究」が進む幌延の隣町から ★久世薫嗣、田中真生

「復帰」50年 日本になった沖縄は今

- ① 5/20 (金) 18:45~ 侵略・併合 差別と同化の始まり ★金城馨
- ② 6/17 (金) 18:45~ 沖縄戦を考える ★下地輝明

まず歴史の事実を知ろう II - 歴史問題の解決編 会場: 愛生館サロン (愛生館ビル6F)

- ★講師 小林久公 ★コメンテーター 林炳澤
- ② 5/23 (月) 18:45~ 日本軍「慰安婦」問題の解決とは
- ③ 6/27 (月) 18:45~ 個人請求権と国家主権について

ウコチャランケ - 話し合い - アイヌとしての思いを伝え、表現する II

- ① 5/27 (金) 19:00~ 宇梶静江さん 自然と共に生き、平和をつくる
- ② 6/24 (金) 19:00~ 葛野次雄さん 北海道は誰のもの?

このままでいいの? 再生可能エネルギーの進め方 part10

- ① 5/31 (火) 18:45~ 風力発電は鳥類にどのような影響を与えるのか ★浦達也
- ② 6/28 (火) 18:45~ 再エネ推進政策がもたらしている環境破壊の解決に向けて ★山口雅之

事務局だより



年度がかわり、すでにいくつかの講座は開講し始めていますが、5月からは新年度の講座が続々と開講します。今期はいつにもましてたくさんさんの講座が企画され、前期だけで28コース、164回の講座が予定されています。コロナ禍となった一昨年から、zoomを活用したオンライン受講も定着しましたが、反面、会場参加の人数がコロナ禍前に比べて少なめなのが残念です。そろそろ皆さん、「遊」に足を運んで講座に参加してみませんか?

会場にしろ、オンラインにしろ、複数の講座に掛け持ちで参加してくれる熱心な参加者が増えたように感じています。2月から3月にかけて、インターンとして講座運営に協力してくれた二人の学生(12~13p参照)も、自分の親よりも年上の人たちが熱心に学び、活発に意見を交わしあう姿をみて、刺激を受けていたようです。逆に意欲的な学生の参加は、「遊」の講座に新鮮な風を吹き込んでくれたように思います。

かなり前から話題にはあがっていたことですが、「遊」にとって世代継承(世代交代ではなく継承です)の課題は待ったなしの状況になってきた感があります。インターン生に企画してもらった「性の多様性を考える」という単発の講座には、「遊」にはめざらしく高校生参加もありました。「遊」が多様な市民が集う場であり続けるためには、世代を超えた学びと交流の場である必要があります。改めて、そうした場づくりを目指していきたいと思う今日この頃です。(小泉雅弘)

内科・神経内科
札幌中央
ファミリークリニック
外来一般診療
月火木金9:00~11:30
札幌市中央区南1条西11丁目
ワンズ南一条ビル6F
TEL. 272-3455

いつだって No Nuke!

北海道のエネルギーの未来を考える
10,000人の会



さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

オンライン講座 (2022年5~6月開講分)



講座のお申込は、
<https://ssl.form-mailer.jp/fms/2339b339737960>
より申込フォームにご記入のうえ、送信ください。



ベーシックインカムを再考する - 生活保障と脱成長との関連から

- ① 5/6 (金) 19:00~ ベーシックインカムとは何か ★樋口浩義
- ② 6/3 (金) 19:00~ 我が国でのベーシックインカム導入案 ★樋口浩義

環境正義を考える - 環境被害と人権、そして脱植民地化

- ① 5/24 (火) 19:00~ アメリカ核開発の現場から環境正義を考える ★石山徳子
- ② 6/20 (月) 19:00~ マーシャル諸島 終わりなき核被害を生きる ★竹峰誠一郎

人も動物も満たされて生きる - アニマルウェルフェアをめぐる part 6

- ② 5/26 (木) 18:45~ 「代替肉」「培養肉」と動物福祉を考える ★岡田千尋、吉川友二
- ③ 6/23 (木) 18:45~ 北海道の酪農現場の実態から ★菊地純子、西村紗希



さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

教室開催講座 (2022年5～6月開講分)
(会場記載のないものは愛生館ビル5F 501会議室にて)



老いと向き合う part 7

- ① 5/6 (金) 14:00～ 施設・終の住処を考える ★森脇栄一
- ② 6/3 (金) 14:00～ 口腔筋機能を高めよう! ★石丸美鈴

アイヌアートデザイン教室 ★講師 貝澤珠美 毎月第二・第四水曜 13:00～

花さんの読書ゼミ 新著『生きる場の思想と詩の日々』を読む ★チューター 花崎皋平

- ① 5/19 (木) 14:00～ ※5/12から変更になりました。 ② 6/9 (木) 14:00～

新聞がなくなる!? 会場: 愛生館サロン (愛生館ビル6F)

- ① 5/12 (木) 18:45～ 新聞が危ない!—今、新聞が直面している問題 ★飯島秀明ほか
- ② 6/9 (木) 18:45～ 私と情報—市民は今どのように情報を得ているか? ★佐藤碧、巻悠悠、遠藤昌子

IT勉強会 ★コーディネーター くらだとしひこ

- ① 5/13 (金) 18:45～ ② 6/10 (金) 18:45～

メタバースとSDGs 社会の循環 ★講師 依屋年彦

- ① 5/14 (土) 14:30～ 早過ぎたセカンドライフの先駆性
- ② 6/11 (土) 14:30～ クラスタという日本からの挑戦

読書室 よりみちまわりみち ② 5/21 (土) 14:00～ ③ 6/18 (土) 14:00～

『人新世の「資本論」』を読む 会場: 愛生館サロン (愛生館ビル6F)

- ② 5/21 (土) 14:00～ ③ 6/18 (土) 14:00～

カムカム英語と戦後英語教育—英語との付き合い方を考えるために ★講師 小山内洸

- ① 5/25 (水) 18:45～ 戦後の英会話ブームはなぜ起きたか
- ② 6/22 (水) 18:45～ カムカム英語の教材と教授法の特徴 出会う英語☆英語で語ろう☆

多文化共生、知る伝える関わる「学びの教室」—コリア文化を中心に

- ① 6/2 (木) 19:00～ 演劇・映画「焼肉ドラゴン」

北海道の問題から地球と共生の未来を考える

- ① 5/28 (土) 14:00～ アイヌの起源と人権 ★西原智昭、多原良子 ※5/11から変更になりました。
- ② 6/11 (土) 14:00～ 北海道が再エネに覆われる日 ★西原智昭、佐々木邦夫

編集後記

「戦争」とは言わずに「事変」から始めて「核」で終わって77年。廃棄が間に合わず十分すぎる「核」を抱えたまま始まった「特別軍事作戦」。これはどんな形で終わるのか。「反戦」の声は上がるも、終わらせようとする動きが見えない中での182号の編集作業でした。連載二つ(柚原誓子さん、花崎皋平さん)が終わり、一つ(原田公久枝さん)が始まりました。(く)

ゆうひろば

発行: NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目 愛生館ビル5F 501

・郵便振替口座: 02780-5-47036 (名義: 自由学校「遊」)



- ・TEL:011-252-6752
- ・FAX:011-252-6751
- ・syu@sapporoyu.org
- ・http://www.sapporoyu.org



web サイト



F B ページ